

## 書評

**Michael J. Futch, *Leibniz's  
Metaphysics of Time and Space*  
(Springer, 2008, x+205p.)**

枝村祥平

本書は、オクラホマ州のタルサ大学准教授（2008年当時助教）である著者が、ライプニッツ(1646-1716)の時間と空間の形而上学を古代～近代の哲学者たちや現代の議論をも踏まえながら解釈し提示したものである。なおファッチはエモリー大学で現北米ライプニッツ学会会長ドナルド・ラザフォード（現在はカリフォルニア大学サンディエゴ校教授）を指導教員とし博士号を取得しており、本書はそこでの研究を発展させたものと言える。

本書は序論に続く八つの章によって構成されている。第一章ではまず、ライプニッツ以前の多くの哲学者による時空論が紹介され、彼らが概ね時空に関する実体主義者(substantialist)と還元主義者(reductionist)とに分類されると述べられる(1.1)。ガッサンディ、ニュートンら実体主義者によれば、時空はそれらに位置づけられる存在者たちとは独立に存在し、それらの存在者とは独立の性質をもっている。一方ライプニッツら還元主義者によれば、時空は存在者相互の関係に過ぎないとされ、時空の独立存在は否定されるのである。次に長い伝統をもつ二つの思想が紹介される。つまり、全て

の存在者（ないし被造物）は同一の時間と空間によって秩序づけられており、世界ないし宇宙は一つであり時空は統一されているという主張(1.2)と、時間と空間が無限の広がりをもつという主張(1.3)である。最後に時間と空間の重要な差異として、時間の線形性(linearity)が紹介される(1.4)。ストア派は時間が回帰・反復すると考えたが、これに対しニュートンとライプニッツがともに時間が線形で不可逆的であると考えたことが確認される。

第二章では、ライプニッツが非様相的還元主義(non-modal reductionism)を取っていたとされる。非様相的還元主義に従えば、時空はすべて現実に存在する物理的存在者によって満たされている（これに対して様相的還元主義によれば、時空に何も存在しない時点あるいは場所があっても、そこに何らかの物理的存在者が存在すると想定することが可能であればよい）。ファッチによれば、非様相的還元主義は充足理由律によって正当化される。つまり、物理的存在者を欠いた時空上の二つの場所に内的な差異を見出すことはできず、それゆえにそれら二つを異なった時点ないし場所と想定することはできないとされるのである。

第三章では、時空の統一性が改めて論じられる。時間は、平行した複数のものがあるわけでもないし、途中で分岐したり一本に戻ったりするわけでもない。時間の秩序は常に一つである。また空間はライプニッツにおいて、共可能的な(compossible)もの

の秩序であるとされ、世界において同時に存在するすべてのものは同一の空間において秩序づけられているのである。

第四章では、時空の限界が論じられる。ファッチはここで、ライプニッツが時間の始まりはあるか否かについてア・プリオリに結論づけることを避けていたとする。一方でライプニッツは、時間を無限に遡ることが不可能だとは言えないと指摘している。他方でクラーク宛書簡では、時間が無限の広がりをもつとしても、時間の始まりを否定する必要はないとされている。始まりがあっても、時間軸が未来に向かって際限なく伸びていけば時間は無限であるといいうるからである。ライプニッツは時間の始まりがあることもないこともありうると思っていたというのがファッチの解釈である。

第五章では、時間の非対称性が論じられる。ライプニッツによれば原因となるものは結果となるものに時間的に先行し、時間の方向は因果関係で規定される。そして時間が不可逆で非対称的であり線形であることが再確認される。

第六章では、現代の時間論で頻繁に論じられているA理論及びB理論が取り上げられる。そして、ライプニッツの立場はA理論よりもB理論に近いと結論づけられる。A理論によれば、過去・現在・未来は基本的なものであり、これらを非時制的関係によって定義することは出来ない。他方B理論によれば、過去・現在・未来は、より早い・同時・より遅いという関係によって説

明することができる。ファッチは、B理論が変化一般を否定しているとの見解を批判し、ライプニッツがB理論と親和的な立場を取りながら変化を認めていたことを強調する。

第七章では、単純実体ないしモナドを基軸とする形而上学が紹介され、後期のライプニッツにおいては厳密に言えば存在するものはモナドとその表象及び欲求のみであることが確認される。その上で、モナドは非物質的でそれ自体として空間に属するものではないが、表象主体であるモナドは身体を視点として現象としての物体の世界を表象しているのものでその身体に位置するとみなされ、派生的な意味で空間的性質をもつとされている。表象主体以外のモナドもまた、表象主体によって表象される物体と対応関係を持ち、その物体に位置するとみなされる。またモナドは時間において秩序づけられている現象を表象することにより、時間の秩序に従う。現象としての物体と、それについてのモナドの表象作用は、同じ時点に属するとみなされるのである。

最後に第八章では、ライプニッツの時空の形而上学と神学との関係が考察される。ライプニッツにとって神は被造物に空間を介して現前するわけではなく、被造物への絶えざる作用を介して現前する。また、神は時間軸において無限の持続をもつという意味で永遠であるわけではなく、時間を超えているという意味で永遠であるとされる。

クラーク宛書簡など、時間や空間を論じ

たライプニッツのテキストは20-21世紀の優れた哲学者たちの関心を引いてきた。その一方で、ライプニッツの時空論のみに焦点をあてた研究の蓄積は未だ十分なものであったとは言えないように思われる。その意味で、本書はエドワード・カマラ(Edward Khamara)の*Space, Time, and Theology in the Leibniz-Newton Controversy* (Ontos 2006)と並び、この興味深い分野に焦点をあてた優れた研究書といえるだろう。また他の英語圏の研究書の例にもれず明快な主張を含む。

ただ、それらの明快な主張の中には解釈としての検討の余地を残しているものもある。例えば、ライプニッツにおける空間の還元主義の分析は議論が単純に進みすぎているように思われる。ファッチは充足理由律に基づいて物理的存在者を欠いた空間の場所は形而上学的に不可能であり、いかなる可能世界においても見出されないと考える。ここでファッチが批判対象とするのはカマラである(p. 48: Kh pp. 476-8)。カマラに従えば、ライプニッツは様相的還元主義を取っていることになってしまうとファッチは言う。そうすると、ある可能世界においては、なるほどいくつかの箇所物理的存在者が見出されはするが、何らの物理的存在者が見出されない場所もあることになる。ファッチによればこのような想定は実は不可能であり、このような可能世界はありえないのである。

ファッチによる充足理由律に基づいた真空の排除には疑問が残る。確かに、ライ

プニッツは充足理由律に基づいて内的性質において完全に同一の単に数的にのみ異なる事物は存在しないとした(G7 372)。しかし、ライプニッツは現実的なもの(*actualia*)と観念的なもの(*idealialia*)を区別し、現実的なもの同士は常に内的な差異をもっているが観念的なものはそうではないとした(G2 282)。観念的なものとは、数・幾何学的対象や空間の点などの抽象的存在者である。そうすると、空間における二点が内的性質において何ら異ならないとしても、それにより充足理由律を侵犯することにはならないと考えられる(cf. G7 364)。

他方で、ライプニッツによればいかなる可能世界においても、表象主体にあらわれた物理的現象の宇宙は充実しており、物理的存在者を全く欠いた場所は存在しないとファッチの指摘自体は傾聴に値する。事実ライプニッツは『弁神論』(1710)で、可能世界においてはすべてが結びついているとし、宇宙はどんなものであれ大海のように一まとまりになっており、どんな微かな運動であつてもどのように離れた場所へも波及していくとしている(G6 107-8)。これは、現実世界においてのみならず、他の可能世界においても、物理的現象の世界は充滿していると示唆する。

それではなぜライプニッツはこのような主張をしたのだろうか。重要だと考えられるのは、精神は(そして一般にモナドは)自らの身体を介して他のすべての物体を表象するという主張である(G5 141)。ライプ

ニッツによれば、いかなる身体も、宇宙におけるすべての運動からの影響を受けている。どのような離れたところからきた、どのような微かな運動でさえ、何らかの影響が身体に及んでいる。そして、モナドは身体におこっている物理的現象を表象することにより、身体以外のすべての物体を表象し、ひいては他のすべてのモナドを表象することになるのである。ここでもし、仮に二つの物体が真空によって完全に物理的に隔離されているのであれば、一方に起こっている運動は他方に波及されないことになるだろう。このように考えると、物理的現象の世界が充満しているということは、すべてのモナドが身体を介して他のものを表象するということから要請されるとは考えられないだろうか。

確かにカマラも指摘しているように、ライプニッツが真空の存在がありえたことを示唆している箇所もあるのも事実である (G5 227)。ここでライプニッツは神が真空をつくるという想定は奇跡のようなもので自然の秩序にそぐわないとしている。自然の秩序を実現しようとする神は奇跡を乱発させはしないが、ライプニッツは奇跡の形而上学的可能性を否定はしない。となれば、神が別の意志をもてば真空をつくることもできたとも思われる。ただこの場合、真空 (*vuide*) という語でライプニッツが意味しているものを探る必要がある。ライプニッツはここでむしろ、現象としての物体に何ら対応したモナドが存在しない場合、その物

体の場所を真空と呼んでいるのだと考えられる。そうすると、この場合の真空とは、何らの現象としての物体も与えられない空間の場所ではないことになる。また確かに、ライプニッツは神が空間を充実させなければ神は不完全な創造をしたことになるとしているが、そのような創造が不可能であったとは述べていない (G7 378)。しかしここでも、ライプニッツは神は現象に対応したモナドを創造しないこともできたが、対応したモナドが存在することが望ましいので結局それらを創造したということを示唆していると考えられる。

以上のように、神がいかなる創造をしようとも、表象主体たるモナドにあらわれた物理的現象の世界は充満しているという主張自体は妥当かもしれない。ただ、ライプニッツはこの主張を、ファッチの言うような仕方で充足理由律を使って正当化したわけではないと考えられるのである。

#### 略号

G = *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*. Ed. C. I. Gerhardt. Berlin: Weidmann, 1875-1890. Reprint, Hildesheim: Georg Olms, 1978. Cited by volume and page.

Kh = Khamara, Edward. 1993. "Leibniz's Theory of Space: A Reconstruction." *Philosophical Quarterly* vol. 43. pp. 472-88.